

教材化に教師の工夫

親しもう
深めよう
NIE

2012年度実践校報告から

6日に琉球新報社で行われた県NIE実践報告会では、実践例の広がりやNIEの有効性が報告された一方、中高での取り組みが十分広がっていないなどの課題も浮かび上がった。

実践例広がる

NIEアドバイザーの佐久間洋伊平屋小教諭は「沖縄におけるNIEの教材化は全国と比べてもレベルが高い方だ」と力を込める。

新聞はあくまで「素材」。教師はそれを授業で活用できる「教材」へと仕立て上げる必要がある。アドバイザーの仲程俊浩豊見城中教諭は「新聞は教材



県内のNIEをリードするアドバイザーの(左から)仲程俊浩豊見城中教諭、甲斐津諭コザ小教諭、佐久間洋伊平屋小教諭。3月6日、那覇市天久の琉球新報社



クラス全員の投稿文が新聞掲載された伊平屋小6年の児童たち=1月24日、伊平屋村立伊平屋小学校

用で作られたものではない。教材化は教師の力量や工夫が問われる」と指摘する。

4コマ漫画や写真を使った実践例は各校で取り入れられ、実践法として広く浸透している。「慣れ親しむ」ことを第一に、読解力や想像力、表現力を身に付けさせ、社会への関心を促すことを狙いとして普及している。

他にも、記事に意見を述べる「1分間スピーチ」、気になる記事に感想を書き込んだ付箋紙を貼る「新聞ツイッター」などの取り組みが報告された。

成果と課題

伊平屋島では、新聞が届くのは午後、情報が遅れて届くというところもあり、家庭での新聞購読は6年生で5割程度だった。それが新聞に慣れ親しむ習慣が身に付いたことで「購読が7割

行政と連携し充実を

以上に増えた。児童の日記の文章量も他校の6年と比べて2倍以上になった」(佐久間教諭)との報告があった。

課題として「NIE教材を研究する時間の確保、職員間のさらなる情報の共有が必要」(古波津諭コザ小教諭)、「授業で使用する新聞の確保は行政のサポートも必要」(佐久間教諭)などの声があった。

アドバイザーの甲斐津諭コザ小教諭は「単発の実践は『点』。それをどう『線』にするか、各教科へとつなげるかが大事」と話し、「学校側と保護者、新聞社、アドバイザーの間で連携が欠かせない」と強調した。

中高での広がりが課題

豊見城中の仲程教諭は「中学でのNIEの広がりはまだこれからだ」と課題を口にした。赴任当初から継続したのが新聞について学ぶ「NIEクラブ」、給食時間に地元2紙から選んだニュースを放送する「NIEアフター」の取り組みだ。

実践校としての5年間を振り返りながら「小学校と違い、自分の担当教科と新聞を結び付けるのが難しい。まずは道徳や学活で使ってほしい」と提言した。

中学、高校でNIEが広がるかは、小学校で実践されているような学校単位の取り組み、関係者間の連携などが鍵を握る。

県NIE推進協議会の山内彰会長は中高での課題に触れた上で「実践と理論が噛み合っているのがNIEだ。行政との連携で指導体制を充実させていきた」と総括した。